様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　４ 月 ２５ 日現在

機関番号：２２７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2021
課題番号：１６Ｋ０１９９３

研究課題名（和文）第二次世界大戦中の日タイ同盟の実像に関する研究

研究課題名（英文）Real Image of Thai-Japanese Alliance during World War II

研究代表者
柿崎　一郎（Kakizaki, Ichiro）

横浜市立大学・国際教養学部（教養学系）・教授

研究者番号：００３１５８２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はタイ側で作成した日本人とタイ人の間の事件・事故に関する膨大な資料から、日本人とタイ人の間で発生した交通事故、騒動、窃盗、強盗・襲撃の4種類の事件・事故計3,373件と2,414人の検挙に関する情報を抽出し、地理的・時期的な分布や内容、背景、処分など様々な側面から分析を行った。その結果、日本側に起因する事件・事故は開戦直後に多発したものの全体的に減少傾向にあるのに対し、タイ側に起因する事件・事故は逆に戦争末期に急増していたことが明らかとなり、日本側もタイ側も多発する事件・事故に我慢を強いられながらの同盟、すなわち日タイ同盟の実像は我慢の同盟であったとの結論に達した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、戦史研究の新たな方法論を提示することと、日タイ間の同盟関係をミクロレベルから捉えなおすこととにある。本研究では戦時中のタイで発生した日本人とタイ人の間の事件・事故を網羅的に記録した資料を用いることで戦争期間中の日本人とタイ人の関係性の変化を明らかにすることが可能であり、戦史研究の新たな方法論を提示している。このため、本書は日タイ関係史の新たな事実を掘り起こすとともに、今後の両国間の関係強化のためにも極めて重要な意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：This study aims to analyze the incidents/accidents: traffic accidents, troubles, thefts, attacks & robberies, and arrests between Japanese and Thais during World War II from various aspects such as location, timing, background, disposal and so on. The result was that while the incidents/accidents by Japanese occurred most frequent at the initial stage of war, those by Thais rapidly increased at the last stage of war, which meant that Japanese had to endure frequent incidents by Thais. The alliance between Japan and Thailand, therefore, was the alliance of endurance.

研究分野：タイ地域研究

キーワード：タイ　日本軍　第2次世界大戦

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

第 2 次世界大戦中にタイが日本と同盟を結んだことは周知の事実であり、これまで外交史的側面からの研究がなされてきた。しかしながら、先行研究はあくまでも外交関係というマクロな視点から見たものであり、実際にタイ国内における日本兵とタイ人とのミクロな関係を明らかにしたものではない。確かに政府間では条約や協定を結んで同盟関係が構築されたが、その関係を実質的に作り上げていくのは日本軍とタイ政府及び国民であり、究極的にはそれぞれに所属する日本兵とタイ人の個人的な関係に行きつく。このようなミクロなレベルでの日本兵とタイ人の関係に焦点を当てることで、外交関係というマクロな視点からは見えてこない日本とタイの間の同盟関係の実像が明らかになることが期待された。

２．研究の目的

本研究は第 2 次世界大戦期間中のタイにおいて、いつ、どこでどのような日本兵が関わる事件が発生していたのかを記録するデータベースを作成し、それを用いてミクロレベルの日タイ間の事件の発生頻度、地域的傾向、事件内容の傾向を数量的に把握し、それを分析することで日タイ間の同盟関係のミクロレベルから見た実像を解明することを目的とした。すなわち、戦争が始まってから終わるまでの間にタイ国内で発生していた日本兵とタイ人の間の事件を数量的に把握することで、同盟を結んでいた両国人の間の事件はどのような傾向を示しているのかを解明することで、マクロなレベルで設定されている同盟関係の真の姿を分析することを目標とした。

３．研究の方法

本研究はタイにおける公文書資料の収集が中心となることから、計 10 回の海外出張を行って対象資料の収集を行い、それを基に日本で資料のデータベース化を進め、分析を行なった。この 5 年間の間にサバティカルのようなまとまった時間を利用した滞在はできなかったことから、年 2 回の学期間の休み（春及び夏）を利用し、それぞれ最大で 4 週間程度の海外出張を行い、タイ国立公文書館での資料収集を進めた。途中で新型コロナウイルスの影響を受けて最終年度の資料収集ができなくなったが、1 年間研究期間を延長することで当初計画していた調査はすべて行うことができた。現地で集めてきた資料は日本にいる間にデータベース化を進め、分析に使用できるような形に整備した。なお、分析に当たっては地理情報システム（GIS）を使用して、タイ国内での事件発生状況を示す地図を多数作成した。

４．研究成果

1941 年 12 月 8 日未明にタイへの日本軍の上陸から始まったタイの第 2 次世界大戦であったが、タイは日本と同盟を結んで枢軸国側の一員となったにもかかわらず、裏では抗日派が連合軍側と公式に連絡を取っていた。戦争末期には完全に二面外交と化していたものの、タイは日本との同盟を終戦まで守り抜くことで日本との衝突を回避したのみならず、連合国側の同情も得たことで敗戦国としての扱いを受けずに済んだ。本論は戦時中にタイ側で作成した事件・事故記録から日本軍が関係する事件・事故の全体像を構築し、それがどのような背景の下で発生したのか、そしてそれが日タイ関係にどのような影響を及ぼしたのかを分析することを目的とした。この目的を達成するために、筆者は①日本軍が関係する事件・事故の全体像の構築、②事件・事故の背景の分析、③事件・事故から見える日本人とタイ人の関係性の解明、という 3 つの課題を設定した。具体的な作業としては、まずタイ国内における日本兵の分布状況を確認した上で、日本軍が関係する事件・事故のうち、交通事故、騒動、窃盗、強盗・襲撃、検挙についてそれぞれ分析を行って事件・事故の全体像の構築を行い、最終的にそこから見えてくる日タイ同盟の実像の総括を行った。

最初のタイ国における日本兵の分布については、駐屯地と訪問地から開戦から終戦までの変遷と日本兵が駐屯・通過した箇所の把握を行った。駐屯地の数については開戦後に一旦は減少に転じたものの、その後増加に転じて 1945 年半ばに過去最大の 102 郡にまで到達していた。これは戦争末期にタイの役割が後方から前線へと変化していく過程で起こったものであり、各地からタイに流入してきた日本兵が国内各地で駐屯を始めたことに起因していた。訪問地については開戦直後、1943 年、戦争末期の 3 つの時期に数が多くなっており、戦争末期には新たな交通路の調査のための訪問が多くなっていた。訪問地を含めることで戦時中の日本人の足跡はさらに緻密になり、タイ国内のすべての県に日本人が最低 1 回は訪問していたことが明らかになった。このため、日本人とタイ人の間に発生する事故・事件はタイ国内のいたるところで発生する可能性があったことになる。なお、バンコク市内の駐屯箇所についてもその変遷を解明した結果、やはり戦争末期に駐屯箇所が大きく増加して最終的に終戦時には 75 ヶ所に達していたことが確認された。

このような日本兵の分布状況を踏まえたうえで、具体的な事故・事件の分析を行った。最初の交通事故については計 683 件が記録されており、バンコクでの件数が全体の約 9 割と圧倒的に

多くなっていた。事故件数は開戦直後と戦争末期に多くなっていたが、両者の差はそれほど大きくはなかった。大半の事故は日本側の自動車とタイ側の車両や歩行者との間に発生した事故であり、事故相手ではサームローが全体の約 3 分の 1 と最も多くなっており、以下自動車、歩行者、二輪車が続いていた。バンコクでは日本兵の多かったパトゥムワン郡やバーンラック郡での交通事故が多くなり、とくに件数が多かったのはパトゥムワン郡のサームヤーン交差点であった。交通事故が起こる背景としては、タイの道路の狭さや市内軌道の線路の存在などの構造上の問題と、加害者である日本側の自動車の速度超過や無理な追越などの不注意、そして被害者であるタイ側の車両の運転手や歩行者が不慣れであり、急激に数を増やした高速で走行する日本側の自動車に十分対応できなかったことが挙げられる。タイ側の被害者が圧倒的に多かったことから、タイ側の合同憲兵や警官は日本側と交渉して少しでも多くの補償を得られるよう尽力していた。

次の騒動については、全国で記録された件数は計 803 件であり、バンコクでの発生件数が全体の約 6 割を占めていた。発生件数は開戦直後が突出しており、戦争末期にやや増加していたものの、その数は開戦直後のピークの半分程度でしかなかった。騒動には様々な種類のものが存在するが、そのほとんどは日本側が加害者となるものであった。原因としては酒酔いによるものが全体の約 4 割と最も多くなっており、サームロー、女性に起因するものが続いていた。一方で、騒動の具体的な行為としては暴力が全体の約 3 分の 1 と最も多く、以下侵入、破壊、武器による恐喝が続いていた。発生箇所については、バンコクではバーンラック郡、パトゥムワン郡の順で多かったが、旧市街での件数が相対的に多かったのが特徴であった。地方では泰緬鉄道沿線が最も多くなっていたが、必ずしも駐屯・通過する日本兵の数と騒動の件数が連動していたわけではなかった。このような騒動は日本兵の優越感によって発生していた側面が大きく、とくに開戦直後に入ってきた日本兵の振舞の悪さが大きく影響していた。このため、タイ側が綱紀粛正を求めて繰り返し日本側に働きかけており、泰国駐屯軍の設置後の日本側の綱紀粛正策とも相まって騒動件数が減少したものと捉えられた。しかしながら、タイ官憲との騒動はむしろ戦争末期に増加する傾向にあり、タイ側も警戒を強めていたことが確認された。

窃盗については、本論で扱った事件・事故の中では最も多い 1,644 件が記録されていた。窃盗では地方での件数が全体の約 6 割とバンコクより多くなっており、交通事故や騒動とは傾向が異なっていた。また、これまでとは異なりタイ側が加害者となる事例が圧倒的に多くなっていた点も特徴であった。件数の変化を見ると、開戦直後の件数が非常に少ないのに対し、戦争末期の件数が大幅に多くなっていた点が大きな特徴であり、1944 年 10 月以降に発生した窃盗が全体の約 6 割を占めていた。盗まれたものについては、電信線・金属線が最も多く、繊維、車両、金属製品が続いていた。発生箇所については、バンコクではパトゥムワン郡に次いで埠頭や倉庫が集中していたヤーンナーワー郡で多くなっており、プラカノーン、ドゥシット郡の件数も比較的多くなっていた。地方ではやはり泰緬鉄道沿線に集中していたが、チエンマイ、ナコーンサワン、ウボンなどの地方都市でも件数の多い場所が存在した。とくに、電信線・金属線の窃盗はナコーンパトムやサムットプラーカーンなど泰緬鉄道の沿線以外でも頻発していた。窃盗が急増した背景には深刻なモノ不足が存在していたが、それ以外にも日本側の警備の緩さ、盗品を購入する業者の存在、窃盗容疑者の釈放件数の増加、そして日本軍への不満も背景として存在していた。

強盗・襲撃については、件数全体では計 243 件と少なくなっており、その 8 割以上が地方で発生していた。やはり戦争末期の件数が最も多くなっていたが、開戦時の衝突が含まれていることから開戦直後の件数も多くなっていた。日本側が加害者である事例が全体の約 2 割であるが、その件数は開戦直後に最も多くなっており、戦争末期の件数の急増はタイ側による事例が急増したことに起因していた。バンコクではとくに件数の多い地点は存在せず、地方では泰緬鉄道沿線への集中が顕著であった。この強盗・襲撃による死傷者は日本側が 153 人、タイ側が 482 人とタイ側のほうが圧倒的に多かったが、タイ側の死傷者の 9 割は開戦時の衝突による犠牲者であり、その後については 1944 年 7 月のラノーン事件で 24 人が死傷した事件が最も大きく、これは完全に日本側の失態であった。他方でタイ側による強盗・襲撃が戦争末期に急増しており、1945 年 3 月には日本兵 9 人が殺害されるターク事件も発生していた。このようなタイ側による強盗・襲撃は日本軍への不満に加え、日本軍から盗まれた銃が拡散していたという背景も存在していた。日本側は単なる物取りの犯行ではなく計画的な抗日活動を疑っており、タイ側はその疑念の払拭を懸命に行っていた。

そして、最後の検挙については、計 2,414 人の検挙が記録されており、全体の 6 割がバンコクでの検挙であった。日本側による検挙が圧倒的に多くなっており、やはり戦争末期に検挙された人が多くなっていた。検挙の発生箇所については、バンコクではヤーンナーワー郡が最も多くなり、バーンラック、パトゥムワンに次いで旧市街のサムパンタウォン郡が上位に来ている点が特徴であった。地方については泰緬鉄道沿線が最も多くなってはいたが、南部での検挙者数も相対的に多くなっていた。これらの検挙者については窃盗や盗品購入容疑が全体の 65%を占めており、抗日・扇動容疑者がそれに次いでいた。このうち、抗日・扇動容疑者については中国人が最も多くなっており、彼らが多く居住していた中華街の存在するサムパンタウォン郡での検挙が多くなる要因となっていた。このような検挙については、その後の取り調べも含めて日本軍憲兵とタイ側の合同憲兵が合同で行うことで合意していたものの、実際には日本側による合意の違反が続いており、有名無実化していた。このため、日本軍憲兵による拷問も断続的に発生しており、タイ側が再三抗議したものの最後までこの問題は解決せず、タイ側の合同憲兵は日本軍憲兵

の手下であると住民から見なされる運命を免れなかった。

最後に、これまでの分析を踏まえて、日タイ同盟の実像の再検討を行った。本論では計 3,373 件の事件・事故と 2,414 人の検挙を対象として分析を行ってきたが、その結果日本兵の振舞は改善されてきたのに対し、タイ人の振舞が戦争末期に急激に悪化していたことが確認された。これは開戦直後にタイに入ってきた振舞の悪い日本兵がタイを通過していったためでもあったが、タイ側の度重なる綱紀粛正の要求や、泰国駐屯軍の設置による日本側の綱紀粛正策によって日本兵の振舞が改善されてきたことも要因であった。しかしながら、タイ側が再三要求した日本軍憲兵に対する合同検挙の順守は最後まで達成されず、タイ側の不満を高めていた。他方で、窃盗や強盗・襲撃が戦争末期に急増していたのはタイ人の振舞の悪化によるものであり、モノ不足に伴う窃盗犯の急増がその背景にあるとはいえ、戦争末期に勢力を拡大した抗日運動の影響も一部現れていた。このため、最終的に日タイ同盟は我慢の同盟であり、日本側の態度の悪さや合意の不履行をタイ側が我慢し、急激に悪化したタイ側の振舞を日本側もまた我慢することで、この同盟が維持されていたと結論付けた。日本側の我慢のほうが大きかったことから、戦争末期にその我慢が限界を超える可能性もあったものの、この時期に日本側が引き起こした凶悪な事件がタイ側に反論の口実を与え、結果として日本側の我慢の限界点を引き上げていたのであった。これが我慢の同盟が終戦まで維持された最大の要因であった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 柿崎一郎	４．巻 72（3）
２．論文標題 第2次世界大戦中のタイにおける日本軍と窃盗（下）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 横浜市立大学論叢人文科学系列	６．最初と最後の頁 1-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 柿崎一郎	４．巻 72（1・2）
２．論文標題 第2次世界大戦中のタイにおける日本軍と窃盗（上）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 横浜市立大学論叢人文科学系列	６．最初と最後の頁 29-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 柿崎一郎	４．巻 49
２．論文標題 第二次世界大戦中のバンコクにおける日本軍駐屯地の変遷―タイ軍最高司令部文書を中心として―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東南アジア　歴史と文化	６．最初と最後の頁 125-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 柿崎一郎	４．巻 20
２．論文標題 第2次世界大戦中のバンコクにおける日本人による騒動―酒酔い騒動を中心に―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 年報タイ研究	６．最初と最後の頁 93-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 柿崎一郎	4．巻 71（3）
2．論文標題 第2次世界大戦中のタイにおける日本軍と交通事故（下）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 横浜市立大学論叢人文科学系列	6．最初と最後の頁 1-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 柿崎一郎	4．巻 71（1・2）
2．論文標題 第2次世界大戦中のタイにおける日本軍と交通事故（上）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 横浜市立大学論叢人文科学系列	6．最初と最後の頁 1-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 柿崎一郎
2．発表標題 第2次世界大戦中のバンコクにおける日本軍駐屯地の変遷
3．学会等名 東南アジア学会
4．発表年 2019年

〔図書〕　計4件

1．著者名 柿崎 一郎	4．発行年 2022年
2．出版社 京都大学学術出版会	5．総ページ数 600
3．書名 草の根の日タイ同盟	

１．著者名 Ichiro Kakizaki	４．発行年 2020年
２．出版社 White Lotus	５．総ページ数 267
３．書名 Scramble for Rails: Japanese Military Transport on Thai Railways during World War II.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関